

海 (かいし) 市

No. 33

● 詩

02 前田 勉 影の記憶

● エッセイ

06 細部俊作 『村田エフエンデイ滞土録』
を読んだ

09 佐藤ただし 水田とツバメ (31)

12 横山 仁 雑記 (33)

影の記憶

前田 勉

東にのびる緩やかな坂を
午後の日脚ひあしがのぼっている

遠い日から
ずっと

西日に晒されたまま
折り重なった時間を抱えてきたような
陽にやけた
街

家々の影が

だれかれの
褪^あせた記憶の端に引つかかって
触^ふれられたくない恥部^{ちぶ}が
少しずつ引き剥がされていく

通る人も見あたらない小路の先に
大堰という名の堰が流れていた
鉄梯子に似た小さな橋を渡ると
またさらに狭い小路が細かく折れて

続き

その先は
行き止まり

この小路に
日脚は届いていない
すべてが真夏日の午後の影

影の端で

紛れるように身を潜め

少年がひとりしゃがんでいた

話しかけても返事はなく

無表情で私を見ている

左目の下に泣きぼくろ

ひとつ

眉毛の濃い

見覚えのある顔だが

だれであったか

小路を引き返し

大堰の橋の角で振り向くと

私のあとをついてきたその少年も

ピタリと止まり

後ろ

を

振り返った

大堰のある小路へ向かう

訪れることから遠くなつたはずなのに

陽のあたらないこの小路は

何も変わっていない

何回か角を折れていくと

憶えていたとおり

行き止まりであつたが

少年の影は見当たらなかつた

後方で犬が吠えている

私の名前を呼ばれた気がして

後ろをみると

角の家の庇から一条の光が射して

小路の影が二分されていた

『村田エフエンデイ滞土録』を読んだ

細部 俊作

梨木香歩著

令和五年二月一日発行新潮文庫※

一八九九年、トルコ政府からの、日本の学者一名を招聘したいとの話を受けて、日本政府が派遣したのが村田だった。彼は、イギリス人女性が管理するイスタンブールの下宿から考古学資料館兼研究所に通う。下宿にはドイツとギリシャから来た二人の考古学者、地元の調理人がおり、それに調理員が拾ってきた一羽のオウムも加わって、新しい日々が始まる。

古代遺跡の発掘、街角に残る滅びたビザンツ帝国の影と霊、イスラム教、現地人と日本人の国民性、ロシ

アや西欧帝国主義列強に浸食されるトルコや日本のこれからのこと等々、友人と語り合い、認め合い、新たな知己を得るなどして見聞を広めていく。

村田は、遺跡の発掘や出土品を調査・研究する中で、発掘の現場や遺物のなかからたちのぼってくる、古代の人々の生活の営みや声を感じとり、この仕事に従事することの「幸せ」を感じる。「戦争や大きな出来事と違って、歴史上の記憶に残ることのない人々のごくごく個人的な喜びや悲しみ、生活の小さな哀歓」こそ永遠であれ、というメッセージを感じる。

やがて村田は帰国するが、その後も彼らとの交友は続いた。しかし、数年後、あの下宿のイギリス人女性から計報が届く。

村田は、「彼らは、全ての主義主張を越え、民族をも越え……かけがえない友垣であった。(略) 私たちの友情もまた、(略) 国境を知らない大地のどこかに密やかに眠って(略) いつか目覚めた後の世で、その思い出を語り始めるのであろうか」と独白する。死後も、悠久の、時間を超えたたとえば遺跡のような佇まいのところまで友と語らう夢を見ているようだ。古代

の遺跡に親しんできたゆえの感慨かもしれない。

それから、調理員が拾ってきたオウムの存在が光っていて、オウム自身も友情を育てたことや、その後の運命など、主人公たちの友情のシンボルのよう描かれている。このオウムなくして物語は色褪せたものになっていったように思う。

この小説を読むなかで、イスタンブールとトルコの歴史に興味がわいてきた。数冊の関連本のページをくくってみると、それはビザンツ帝国やオスマン帝国の歴史にふれることでもあった。

- ・西暦三三〇年、東ローマ帝国は、当時ビュザンテイオンという名だったこの地に首都をおくととし、その名をコンスタンティノープルと改めた。
 - 一五世紀、オスマン帝国の攻撃の前にコンスタンティノープルが陥落し、ビザンツ帝国は滅亡した。
 - ・一方、一三世紀、モンゴル人の襲来から西に逃れてきたトルコ系遊牧民は、アナトリア（小アジアとも呼ばれる）で増加し、定住するようになった。
- 一三世紀後半にはオスマン朝が勢力を広げ、つい

にビザンツ帝国を破ってからコンスタンティノープルをイスタンブールと名を改めた。帝国は一七世紀後期が最盛期で、地中海沿岸のアフリカやバルカン半島周縁部にも勢力を拡大したが、支配地における独立戦争やロシア、西欧の帝国主義列強からたびたびの攻撃を受けるなどして弱体化していく。第一次世界大戦後に最後の皇帝が亡命したことでオスマン帝国は終焉した。この年、内陸部のアンカラに拠点を置いて独立運動を主導してきた勢力によるトルコ共和国が認められた。

・それまで一六〇〇年にわたり、帝都として繁栄してきたイスタンブールに替わって、政府機能（首都）はアンカラに置かれることになった。

イスタンブールは、当時もいまも、地政的に、アジアとヨーロッパという東西を結び、地中海と黒海という南北をも結ぶ文明の十字路、交通の要衝だという。黒海沿岸にはロシアのほか東欧などの四か国が港湾をもっており、地中海に出ようとすれば、イスタンブール市内の海峡を通る必要があるわけで、それだけでもここが重要な経由地だとわかる。

ローマ帝国もビザンツ帝国も、勃興、成長、成熟、爛熟への経過の中で他国を攻め、殺戮し、領土を奪い、版図を広げていったが、やがて腐敗し、瓦解した。オスマン帝国もこれを繰り返すことになった。最盛期を過ぎると、かつてのビザンツと同様にヨーロッパの瀕死の病人と言われるようになった。

作中、次のような言葉があった。

人の世は成熟し退廃する、それをいつまでも繰り返す。(略) そのたびに、新しい何かが生まれる。

それは繰り返す余地があるからです。

人は過ちを繰り返す。繰り返すことで何度も何度も学ばなければならない。人が繰り返さなくなるとき、それは全ての終焉です。

過ちを繰り返すことの中に、次の時代へのエネルギーが生まれてくる、といっているのだろうか。

この小説は二〇〇二年から一年間、KADOKAWAの月刊書籍PR誌「本の旅人」(現在休刊中)に連載された。著者は、当時の「アメリカ同時多発テロ事件

以降、アフガニスタン侵攻に始まる、常軌を逸したアメリカ軍の攻撃があまりにひどい有様で、世界中の深刻な憂いを集めていた」ことが背景にあったと、この文庫版のあとがきに書いている。それから二〇年経つたいま、その繰り返しのように、ロシアがウクライナに侵攻し、いまも終わっていない。死者は増え、ウクライナの町は破壊され続け、驚いたことに、多くの子どもたちがロシアに連れ去られ、ロシア化を強制されているという。

戦争が繰り返される中で、たとえば、より殺傷能力の高い兵器とか、市民や無垢な子どもを狙った残酷な企みというものをも、人は産み出していたことになる。戦争が、人を殺し、残虐な行為に向かわせるものである以上、「(人が過ちを)繰り返さなくなったとき、それは全ての終焉です」という部分は、その過ちを、もう繰り返してはならない、というべきだと思った。

水田とツバメ (三二)

佐藤ただし

・今年のイネと水田

今年は春先から雨の降る日が少ないような気がしていた。春先の三月もそうだったし、田植え後の六月も雨が降らず、イネは移植された環境に馴染めず苦労しているように見えた。雄物川の下流域の比較的暖かい水温の水でイネづくりをしていると、アオミドロという藻が発生しやすく、田んぼの表面は日光が遮られ、水温が高いが地温は低くイネにとっては育ちにくい環境だ。特に田んぼ一枚が一ヘクタールの大きさだと、発生した藻が風に寄せられて片側の畦畔に流れるため、畦畔に近い苗はひよろひよろとした軟弱イネになる。

こうしたイネの状態を良くしてくれるのが雨だ。雨

によって藻は流れ、葉は洗われてイネは生き返る。この辺だと七月に入ってからようやくイネらしい姿になってくる。晴れた日の風の吹く日に田んぼに立つと、イネの葉が一斉に風に揺れ、手を振っているように見える。

七月中旬の大雨の時は六年前のこともあり、農事組合法人のメンバーと午前中に作業小屋に集まり、手分けして農業機械を移動したり、パレットを積み上げてその上に種まき機械を上げたりして、水に浸からないように準備をした。

七月一五日の昼頃から降り始めた雨は、一六日の午後まで降り続き、田んぼの主な排水路は溢れ、大豆を作付けしたところはすつぽりと水に潜り、見えなくなった。草丈が六〇センチ以上に伸びていたイネは半分くらい隠れたが、夕方には雄物川の水位は下がり始め田んぼのほうは大きな被害はなかった。

今回の大雨は秋田市北部では記録的な雨が降ったため、市街地に降った雨が排水能力を上回り、住宅街は水に浸かり大きな被害を受けたが、ここは田んぼの縁

に集落がくつついているような所だったため、降った雨が水路に流れ、その水路が溢れても田んぼが遊水池のような役割を果たしてくれるため、雨が降り止むまでの時間を稼ぐことができる。

今回は六年前の時と比べると四〇センチほど低い水位で治まってくれた。あと半日も雨が降り続くとこの集落も大きな被害が発生したと思う。

こうした大雨が降ると自分が住んでいる土地の地形とか排水経路などを知りたくなる。私が住んでいる豊岩は雄物川の下流部の左岸にあり、田んぼや畑となっている耕作地はこの川が太古の昔から蛇行を繰り返している縁を削って平地を作った場所と推測できる。現在、田んぼの面積は約二〇〇ヘクタールで、私が住む集落は平地の縁に連なっているため、田んぼより少し高い地形となっている。

江戸時代の記録によれば雄物川の川幅は狭く毎年のように氾濫を繰り返し、人々を苦しませてきたようだ。そのため集落の人々は少し高いところに家を建てて暮らしてきたと思われる。この近くにバイパス道路が建設される際、遺跡の発掘調査が行われた。その結果、

裏山の台地となつているところで、住居跡や土器が発見された。その他の所でも土器や矢じりなども見つかっており、縄文時代からここで人が生活していたことが分かっている。

七月の大雨の後は晴れの日が続き、その後は猛暑となった。日誌を見ると八月は雨らしい雨が降ったのは二日ほどだった。畑の土はカラカラに乾き、八月初めに植えたキャベツの苗は葉の縁が焼けてしまった。

比較的涼しい早朝、畑の草取りをしていた母が、スベリヒユの根が深く土の中に入り長くなっていると話していた。私も鎌を土の中に入れ引き抜いてみると、直径一、二ミリくらいの白い根が一〇センチも土の中に伸びていた。乾いた土の中に伸びてゆくこの根はどうやって、土から水分や養分を吸収するのか不思議に思う。自らは移動の術がない植物は、根を伸ばしたり葉の向きを変えたりしながら、生き永らえようとしている。

田んぼのイネはこの夏の猛暑のせいか、八月末だと

いうのにすでに稲刈りが出来そうなくらい登熟の進んだイネが目の前に広がっている。青天の下で黄金色に輝く水田風景は、この世で最も美しい風景の一つに見える。何年も手入れを怠らず、田んぼを作って来たものにとつては、たとえ一瞬であつてもこうした風景を眺められるのは幸せなことだ。

お盆過ぎのこの時期は、イネの姿は殆ど出来上がり、稲刈りを待つだけだ。農家にとって大敵のヒエも稲よりも背丈が伸びて、イネを追い越している。田んぼ一面にヒエの穂が顔を出し、中にはイネが呑み込まれてしまいそうな田んぼも見受けられる。近年、そうした田んぼが増えてきているように思える。現在もそうだと思うが、田んぼにヒエなどの雑草が生えている状態はとても耐えがたいことなのだが、手が回らなくなつて来ているのかも知れない。農業機械や農薬などの資材が進歩してもやはり最後は人の手がいらないと、ヒエなどの雑草ははびこつて来る。それは栽培植物と野生植物の違いであつて共存はあり得ないのかもしれない。野生植物のヒエの種は何年もの間、土の中で出番を待っている。そして発芽の条件が揃うと成長し、

その子孫を大量に圃場に落とし、増え続ける。栽培植物であるイネはその勢いには勝てない。

稲刈り前の美しい水田風景をいつまで我々は見ることができるのか。水田は今後どのように変わつてゆくのか見てゆきたい。

雑記 (33)

横山 仁

6月の「100分de名著」は、ナオミ・クライソンの「シヨック・ドクトリン」だった。ナオミ・クライソンのについては、副島隆彦氏のホームページで書いたが、大冊 (656 ページ、2分冊) なので手が出なかった。講師は、堤未果氏。録画し忘れたものもあるので、NHKのホームページから、コピーペーストする。なお、堤氏には『堤未果のシヨック・ドクトリン—政府のやりたい放題から身を守る方法』(2023年5月、幻冬舎新書) がある。

(引用開始)

第1回「シヨック・ドクトリン」の誕生

「シヨック・ドクトリン」とは、社会に壊滅的な惨事が発生した直後、人々が茫然自失している時をチャン

スととらえ巧妙に利用する政策手法だという。最初にこの手法が大々的に行われたのは、70年代に起こったチリ軍事クーデター。徹底した民衆弾圧で社会全体がシヨック状態にある中、ミルトン・フリードマン率いるシカゴ学派が乗り込み、市場原理主義的な改革を断行。国营企業の民営化、規制の撤廃、貿易の完全自由化で、チリの産業経済は外資の餌食に。空前の格差社会が生まれていく。第一回は「シヨック・ドクトリン」の起源を探り、今、世界を席巻している新自由主義がいかんにして生まれたかを検証する。

第2回 国際機関というプレイヤー・中露での「シヨック療法」

「シヨック・ドクトリン」を国際機関も推し進めることを示したのが1997年の「アジア通貨危機」の事例だ。タイのバーツは暴落、韓国も国家破産寸前に迫り込まれる。欧米各国が救済に動かない中、IMF がついに重い腰を上げる。だが融資をするための条件として、貿易自由化、基幹産業の民営化、財政赤字の解消など厳しい条件を課した。その結果、いずれの国も外資系

企業の餌食となっていく。中露などの大国も、国家が主導して同様の事態を引き起こしていく。元々弱体化した国々を援助する目的で創設されたIMFや、西側陣営とイデオロギーを異にする大国が積極的に新自由主義政策を導入するのはなぜか。第二回は、アジア通貨危機、天安門事件、ソ連崩壊等の事例を通して、国際機関や大国が特定の利害に追従するように変貌してしまった原因を探る。

第3回 戦争シヨック・ドクトリン 株式会社化する国家と新植民地主義

イラク戦争後、占領政策をまかされた連合軍暫定当局（CPA）のブレザー代表は意図的に無政府状態と恐怖の蔓延を助長し市民は思考停止状態に。それを好機として過激な市場開放を断行。そこに米企業が群がった。一方で、この戦争の発端である米国同時多発テロによりセキユリティ産業バブルが生じ、国防の主要機能の急速なアウトソーシングが始まった。「コーポラティズム国家」の誕生だ。政府高官は続々とそれら企業に天下り、そこで生まれる利益を欲しいままに。占

領下のイラクもこうした米企業に食いものにされていく。第三回は、戦争を利権の巣窟と化す「コーポラティズム国家」の問題性を暴き出す。

第4回 日本、そして民衆の「シヨック・ドクトリン」

「シヨック・ドクトリン」は、米南部のハリケーンやアジアの津波災害においても踏襲され、津波で根こそぎにされた沿岸集落の被害をチャンスととらえて、その土地をまるごと民間に売り飛ばして高級リゾート開発へつなげるといふ論理にも応用されていく。堤さんは日本も例外ではないという。だが民衆たちも黙って従っているだけではない。タイでは外資に奪われる前に被災地に「再侵入」。権利を主張しつつ地域ネットワークを使った互助的活動により自力で復興を成し遂げていく。第四回は、日本での事例にも言及しながら、「シヨック・ドクトリン」を逆手にとって民衆たちを覚醒するために利用する方法を模索していく。

(引用終わり)

*

コピペしながら、これはハワイ・マウイ島の山火事そのものではないか、とおもえてきた。Follow the money.

「ハワイ・マウイ島の山火事は自然災害だったのか？」というのは、及川幸久氏の「THE WISDOM CHANNEL」2023.8.15。「なぜ8日、同じ日に4件も山火事が発生したのか?」「山火事なのになぜ水上のボートが全て燃えているのか?」「なぜラハイナ地区が炎のサークルで囲まれたのか?」「なぜ木は燃えなかったのか?」

よく時代劇で遊郭を計画した悪徳商人が、立ち退きのすすまない長屋に火をつけるシーンがあるが、それと同じようなものらしい。もちろん、及川氏が断定しているわけではないが。

8 / 13 「再建されたマウイ島の町が裕福な部外者の手に渡ることを心配するラハイナの住民たち」「マウイ島の地元の人々は、富裕層に土地を売ることを拒んでいた」「現在、地元の人々の多くが土地の売却せ

ざる得なくなった」

たとえば富豪の「オプラ・ウインフリー」はマウイ島の土地を買いあさっていた。マウイ島の約100エーカーの土地を2年で1000エーカー以上に。」

そして、「突然どこからともなく火事が起こり、オプラの近くの多くの家を破壊したが、彼女の土地はそのままだった。」

これに関連して、「文殊菩薩」の野崎晃市氏は「米全国各地で奇妙な火災」として書いている。2023年08月16日(水)。

(引用開始)

ヒューストンの山火事



ハワイで使用された、人工衛星から発射される指向性ビームによる火災だが、米国各地で同時多発しているようだ。

テキサスのヒューストン、ワシントン、カリフォルニア、ペンシルバニアなどでも、奇妙な火災が発生しているのだ。

この火災では、非常に正確に、狙った特定の目標だけが焼き尽くされ、周囲には影響を与えないようにできる。

さらに、金属や溶岩などが溶解するほどの高温を出し、しかも火がなかなか消えないため消火が困難なようだ。

映画『ラピュタ』に出てくるインドラの矢、『アキラ』で人工衛星が発射するビーム兵器が、ついに現実化したのか。

(引用終わり)

及川氏も言及しているが、この武器は、DEW (directed-energy weapon) 指向性エネルギー兵器というものらしい。

また、及川氏は8月16日にも【【ハワイ】続報：ハワイ島の人々の危機は続いている。支援方法のご案内】をアップしている。

「ハワイの学校は休校*夏休みは7月末まで/親が仕事中、子供は家にいるように/ハリケーンで停電に/電力会社は切れて地上に垂れ下がった電線の電気を切らなかつた/警報サイレンもテキストメッセージもなかつた/警察はハワイナから車を出さないように封鎖した/現場に派遣された消防士たちは消火栓が空だった/すべて偶然か？」

「世界経済フォーラム-国連 戦略パートナー」は、
「2018/8/20 ハワイは米国の100%グリーンエネルギー州になる」として、「(2023年)9/25ハワイ・デジタル政府サミット ハワイ島をデジタルAIで統治する計画」するようだ。そのためには、歴史的な土

地や市民はじやまというこらしい。

さっそく「手回しが早いこと：ハワイ州知事が山火事によって荒廃した「土地を取得する」州の計画を明らかにする」というのは、「へっぴりごし」さん。
2023年08月16日(水)

(引用開始)

【GATEWAY PUNDIT】記事より↓↓(Microsoft
翻訳：原文のリンクは後記)

ハワイ州知事が山火事によって荒廃した「土地を取得する」州の計画を明らかにする(ビデオ)
月曜日、ハワイの民主党知事ジョシュ・グリーンは、彼の政権が最近の山火事によって荒廃したラハイナの不動産の取得を積極的に検討していると発表しました。

ハワイ島で発生した山火事の結果、合計99人の死亡が記録されました。当局の間では、これまで以上に焼失地域のわずか25%しか捜索されていないため、死者数の増加の可能性について懸念が高まっています。

地元住民は、家や愛する人の喪失だけでなく、彼らの悲劇を利用してようとしている開発者の不安な注意にも取り組んでいます。

USA トゥアデイは、20年間の故郷が灰になったタミー・カイリラウの特に悲惨な話を報告しました。

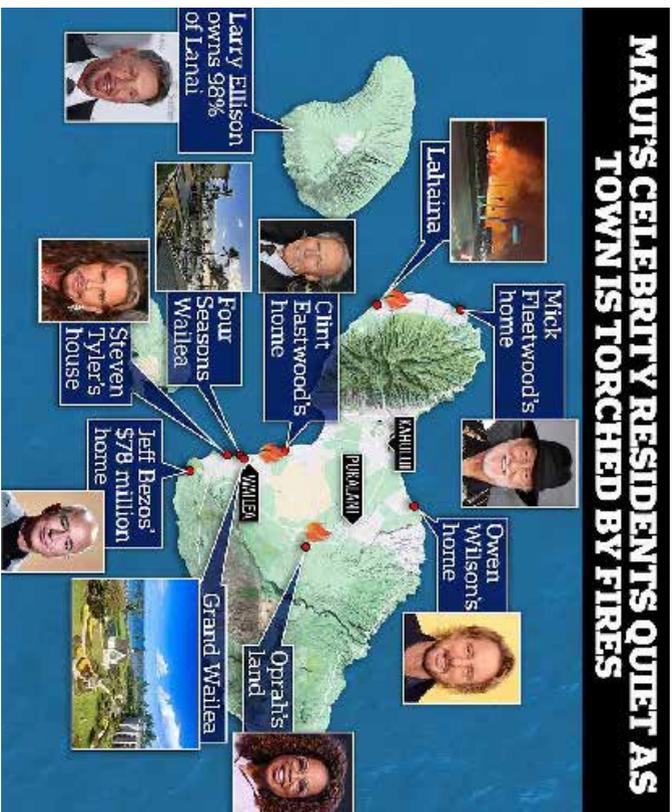
(引用終わり)

米バイデン大統領は「急増するハワイ島火災の死者数に関してコメントはありますか?」と、記者から問いかけられた際「ない。コメントはない」と答えた。その後、「今後、ハワイへの対応策について記者会見の予定は?」とも尋ねられたが、一切答えることなく、車へと乗り込んだ。(ツイッターより)

たぶん、バイデンは、前もってしっていたのだろうな。後日、慰問を決めたようだが。

「文殊菩薩」2023-08-19(07:12)で、野崎晃市氏は、これまでののを、簡潔にまとめています。

グレート・リセットされたハワイ島



ハワイ島のセレブ別荘は無傷

ワウイ島で焼け出された住民たちは、オレンジ色のカードが与えられ、島から出ると援助が受け取れないと告げられたという。

ワウイ島は15分シテイの建設予定地で、悪名高い投資機関ブラックロックが島の再開発計画に投資しているようだ。

焼かれたのは不動産売却に応じなかった地元の人々の家で、オバマやゲイツやベゾフなどセレブ達の別荘は無傷だった。

これを見て、ワウイ島は指向性エネルギー兵器の実験場というより、グレート・リセットの実験場であることに気づいた。

指向性エネルギー兵器による攻撃は、人々とその財産を灰にして、土地を収奪するための単なる手段に過ぎない。

グレート・リセットにより、庶民は家と土地と生命を失い、生き残った人はセレブに使える奴隷として閉じ込められる。
(引用終わり)

さらに、2023年08月18日(金)の「へっぴりごし」さん、「嘘か誠か? : ワウイ島の虐殺」より。

(引用開始)

【REAL LAW NEWS】記事より ↓ ↓ (Microsoft 翻訳: 原文のリンクは後記)

ワウイ島にいるアメリカ海兵隊員は、デインズ・スレートによる残虐行為を目の当たりにしてきた。真紅の潮の中につ伏せて浮かぶ銃弾にまみれた死体、島民や観光客の死体のポケットを漁るハワイ州兵、近隣の食料、水、シエルターへの市民のアクセスを禁じる FEMA と赤十字。

ラハйнаのフロント・ストリートでは、制服警官が理由もわからず歩行者の背中を撃った。その後、警官は

携帯電話で事件を撮影していた傍観者を見つけ、彼も射殺。

死体のポケットを探り、命に別状はなく腫れ上がった指から結婚指輪を引き抜こうとしたとき、銃弾が彼の頭蓋を直撃した。彼は額に手を当て、信じられない思いで血に染まった指を見つめる。彼はうつ伏せになり、もう片方の手からピストルが落ちる。

水曜日の午後遅くマウイ島に到着して以来、海兵隊が殺した5人目のデイナー・ステートの警官だった。

(以下略)
(引用終わり)

ハワイの山火事については、YouTubeで、いろいろな人がコメントしているので、興味がある人は検索されたし。及川氏のYouTubeでも、地元の人SNSを紹介している。8/17は、「ハワイ・マウイ島と山火事とオバマ」、8/21は「山火事の真実とは？マウイの人々の声」。

*

8月27日、秋田市で、参政党外部アドバイザー・銀座エルデアクリニック院長の吉野敏明氏の街頭演説があった。(YouTube、【参政党】恐怖…2024年あきたごまち消失。表示義務無しで放射線育種米に…参照) この中で、「あきたごまちR」というのが話されていて調べたら、「あきたごまちR」に放射線を照射して遺伝子を変えらるらしい。そして秋田県では、令和7年度に全量「あきたごまちR」(重イオンビーム遺伝子変異米)に切り替えるとのこと。

この問題は、YouTubeでもおおきくとりあげられていて、「OKシードロジェクト」からは、「秋田の食の今後はどうなる？/「ゲノム編集」放射線育種/在来種が作る未来の違い」という冊子をDL (<https://bitly.akita0801j>) できるし、また、「ゲノム編集 神話と現実—煙幕の中のガイドブック」の日本語版もDLできる。

例によって、放射能(放射線育種米)安全神話ってか？ ただちに被害。「政府は必ず嘘をつく」(梶氏)。

あしがき

◆拙宅周辺の若い人達は何かの決まり事があるかのように、週末になると（毎週ではないが）それぞれが家の前でバーベキューパーティーを開いている。人前を気にしたり、生活に追われていた若い頃の我が身とは比較さえも出来ない。変化しているんだろうな、何かが。／もう9月なのに毎日暑い。どうしたものか。9月といえば「海市」は8年目か（B）

◆ドウダンの植え込みの脇を通過して散歩することがある。秋には紅葉を楽しませてくれる場所だが、ある日、数本が枯れているのを見つけた。帰宅後、道路沿いに並べた自宅のドウダンも一本枯れかけていた。木もこの暑さに毎日耐えている。まだ三日目だが、水で薄めた木酢液をまいてみている。回復してくれるだろうか。（S）

◆連日の猛暑で寝苦しい日も何日かあった。目が覚めて胸のあたりに手をやると、肌着のシャツの前と後ろを逆に着ていて、首元が絞められていることに気づき、寝苦しいのは暑さだけではないと気がついた。窓の外では近くの家のテレビアンテナにカラスが4羽止まっています、私が畑に来るのを待っている。（T）

◆カラスを飼っている人の動画が、YouTube にアップされていて、おもしろい。Tさんのカラスも、そのうち「オハヨー」といったりするかもしれんぞ。（J）

「海市」 第33号

2023年9月11日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方